

10月24日 日本新薬・山科植物資料館へ3回目の見学会

城陽駅を9時頃の電車で山科・柳辻にある日本新薬山科植物資料館へ10時頃に到着。3回目となる今回の参加者は中束さん、ト田さんはじめ4人。

資料館の当帰栽培地で説明をお聞きする。近くにはセンキュウやチョウセンアサガオも栽培されている。もちろん、日本新薬のシンボルともいえるミブヨモギモ（回虫駆除薬サントニンの原植物）も植えられている。トウキの展示スペースには2年目と思われる株や今年発芽したような可愛い株など10余りが育っていて、緑の濃い色をしている。ミブヨモギ記念館も見学してセミナーハウスでお話を聞く。

今回の見学会は、同じくらいに種蒔をした当帰でも花が咲き、種が取れているものとそうでないものがあり、来年まで待って花を咲かすのかどうかの見極めと、種の保存などについてアドバイスを受けたく企画したもの。

これまでのトウキ栽培について簡単にお話をして、保管方法などについてお尋ねする。

係の方は花が咲くかどうかは条件による、地植えと鉢植えでも異なってくる。鉢植えで6寸ぐらいの鉢にぎゅうぎゅうに詰めて植えると花が咲かないとも言われている、いわゆる“いじめる”と咲かないようです。種については「種ハズレ」と言うこともあるので、種とりそのものが難しいと言うことが言える。持ってこられた種を見る限りは良い種ではないかと思う。保管については冷蔵庫に種だけにして、種の廻りについていいる殻のようなものを取り去って保管することが大切だろう。トウキの種は長期保管が出来ないとされている、2-3年位で発芽しなくなるのではないか。掘り出す場合は湯もみをする。これは土が付いたまま干し、生乾きの状態で湯もみをする。湯もみは80℃（一説には60℃）のお湯につけて揉み、土を落とす。その後、又干して乾燥させる。漢方薬の原料として商業的なしつらえをするのであれば形を整えるなどが必要。自家消費であればその必要はないと言える、など丁寧にお教えいただきました。

寺田李の移植

当帰の話が終わる頃に、寺田李についてのお願いをしました。山科植物資料館で寺田李を育てて頂けないかと言うもの。突然の申し出にもかかわらず、「検討してみます」とのこと。そして翌



日「寺田李の件ですが、この貴重な苗を是非とも当館で栽培させていただければと存じます。大切に育て、一人でも多くの来館者にこの希少な品種を知ってもらいたい。」とのメールを頂きました。この報に森澤さんも喜ばれて、苗の移植準備に取り掛かるとのことでした。移植の時期は、年末頃または年始になるのでは、と思っています。

トウキの展示スペース前

(杉浦 記)